

須賀川市立義務教育学校「**稲田学園**」学園だより

と う う ん
稲 雲

令和7年度 第9号

令和7年9月1日発行

発行者：校長 田中 朗裕



○2学期の始業式を実施しました

8月25日（月）に、2学期の始業式を実施し、82日間の2学期がスタートしました。通常であれば体育館での実施ですが、熱中症の予防対策としてオンラインで教室とつないで実施しました。夏休み中に児童生徒全員が自分の命を守り、元気に登校できたことを嬉しく思います。校長からは、式辞の中で「2学期の多くの行事に目標をもって取り組み、『努力』と『振り返り』を繰り返しながら成長して欲しい。」という話をしました。式の最後には、代表の3年生と9年生の2名が「夏休みの思い出」や「2学期に向けた抱負」を堂々と発表しました。その後、大会やコンクール、検定等の表彰も行い、表彰を受けた児童生徒が、全校生に向けて自分の思いを発表することができました。

P T A親子奉仕作業や秋華祭、小学校陸上競技交流大会、松明あかしなど、2学期には保護者や地域の皆様にご支援やご協力をいただく行事がたくさんあります。私たちも「チーム稲田学園」としてがんばってまいりますので、今後ともよろしくお願いいたします。



○英語弁論大会・駅伝大会の壮行会を実施しました!!

8月26日（火）に、地区英語弁論大会・支部駅伝競走大会の壮行会を実施しました。会のはじめに、英語弁論大会に出場する2名が緊張しながらも、夏休みに練習を重ねた英語のスピーチを児童生徒の前で発表しました。次に、支部駅伝大会に出場する特設駅伝部の生徒一人一人から大会に臨む目標や意気込みが伝えられました。会の最後には、代表生徒の激励の言葉や応援団からの力強い応援を受け、大会への決意を新たにしてくれたと思います。



○自分の言葉で全校生に呼びかけを続けています!

「『いなだあいさつ』を徹底しましょう。」「熊や不審者の侵入を防ぐために昇降口などの扉を開けたら必ず閉めるようにしましょう。」という放送が校内に流れました。熊の出没や被害のニュースが毎日のように聞かれる状況、そして夏休み明けということもあり、「元気なあいさつ」ができていないという状況を受けて、生活委員が自分たちで内容を考え、全校生に呼びかけを続けています。その結果、少しずつあいさつや戸締まりの状況がよくなってきています。

○自信をもって、そして堂々と発表しました！

8月28日（木）に大東コミュニティセンターにおいて岩瀬地区中学校英語弁論大会が実施され、本校から暗唱の部に2名の生徒が出場しました。夏休み中の練習の成果が表れ、最後までミスなく、堂々と発表をすることができました。発表中の自信に満ちあふれた表情、発表後の達成感に包まれている姿は本当に印象的で、夏休み中の努力が報われた瞬間だと感じました。

結果は、8年生が7位入賞という素晴らしいものでした。



○「一人一人が輝き、全員でも輝く学級」を目指して

8月22日（金）の午後1時から、会津大学の先生を講師にお招きして、「アンケートQ&Uの理解と活用」というタイトルで校内研修会を実施しました。「アンケートQ&U」とは、須賀川市の小学校3年生から中学校3年生に対して年に2回実施している「やる気のあるクラスをつくるためのアンケート」、「いごこちのよいクラスをつくるためのアンケート」、「自分の日常の行動を振り返るアンケート」という3つで構成されたアンケートです。研修会は、第1回の「アンケートQ&U」の結果帳票の詳しい見方について、講師の先生の説明を聞きながら、先生方が児童生徒や学級の実態を理解し、どのように支援をしていくべきか、質問と解説を繰り返しながら進められました。先生方の真剣な様子から、児童生徒に対する「強い思い」を感じることができ、嬉しい瞬間でもありました。このアンケートの活用を通して、児童生徒のやる気を高める方法やクラスの中で居心地よく過ごすための方法、友人や家族、教師と上手に関わるためのソーシャルスキルを向上させる方法等について、児童生徒や学級の実態を踏まえながら、私たちができることを探し、実践していくことで、今年度の本校の学級経営の基本方針として掲げている「一人一人が輝き、全員でも輝く学級」づくりを進めていきたいと思っています。



随 想

がんばる子どもたちがもつ力 ～夏の甲子園大会を通して～

今年の甲子園大会は、過去最高となる8試合が「延長タイブレーク」になるほど接戦が続き、毎日ドキドキしたり、感動で涙を流したりしながら見ていました。でも試合以上に、自分たちが負けた直後に相手チームに拍手やエールを送る仙台育英の選手たち、決勝戦で負けた直後にスタンドの全方向に感謝の気持ちを表現する日大三高の選手たちの姿は多くの人に感動を与えたと思います。甲子園の「新たな伝統」を生み出したとも思っています。子どもたちの頑張りや心からの行動が、この先何十年も多くの人の行動に影響を与え続けるのだと思うと、選手たちがもつ力の大きさはすごいと心から思いました。そして、県立岐阜商業の選手は生まれつき左手に障がいを抱えながら甲子園という晴れの舞台で輝きました。彼のような困難を抱えている場合、とかく周りの大人は、優しく別の道を示しがちです。しかしそうではなかったのだと思います。きっと彼の野球に対する思いの強さやがんばり、成長を見て、心から彼を信じ、応援したのだと思います。彼にも苦しみはあったことは想像に難くありません。それでも諦めず、自分の夢を叶えた姿は、きっと周囲の人ばかりではなく、同じような境遇で苦しんだり、諦めたりしそうになっている人の希望になったと思います。稲田学園の子どもたちにも、自分たちがもつ力の大きさを感じて、自分たちの「がんばる姿」で、多くの人に感動や希望を与え、新たなムーブメントを生み出す、そんな人になってほしいと思いました。